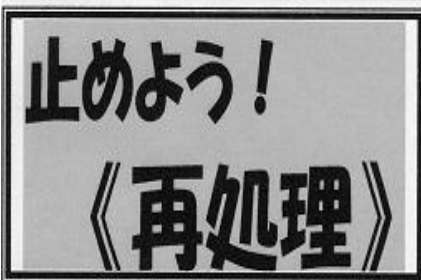


三陸の海を放射能から守る
岩手の会 (略称) **三陸の海・岩手の会**
 郵便振替 02240-5-102650
 ホームページ 《再処理/岩手の環境》
<http://sanriku.my.coocan.jp/>
 《本紙の全バックナンバー掲載》



《**天恵の海**》
 2018(平成 30)年
 8月 30日
 第191号
 編集事務局 S.Oshida
 TEL・FAX 019-623-1636

高レベル放射性廃液 液体のままでは危険だ! 蒸発乾固後の 析出硝酸塩爆発に答えず

日本原燃本社での
 回答書説明会
 これでは納得出来ない
危険が放置される!



質問状の正式回答書を受け取る
 六ヶ所村 菊川慶子さん

七月一九日、六ヶ所村の原燃本社で回答書について「原燃の説明を聞く会」が開催されました。出席したのは提出九市民団体から九人でした。時間が一時間と制限され、二四項目の細かい質問は出来ないでしまいました。ガラス固化がうまく行っていないこと、ミサイルや電磁波攻撃には対応出来ずお手上げ状態になること、落雷対策が不備であること、緊急時のガラス固化体や使用済み燃料、高レベル放射性廃液の移送先がないことが分かりました。(三〇分延長)。市民代表は「液体のままではあまりに危険な『高レベル放射性廃液』について、日本原燃が潜在するハザード(危険)を認め、廃液を早期固化安定化するように求めました。」

高レベル廃液のハザード(危険)を認め、早期に固化安定化せよ

この説明会参加報告の第一は、高レベル放射性廃液の「電源喪失時の沸騰事故や水素爆発について原燃がどう認識しているか」です。私達は、左下図のような、「原子力規制委員会検討チーム会合」に原燃が提出した報告書の資料をもとに質しました。

廃液乾燥固化物、答えず

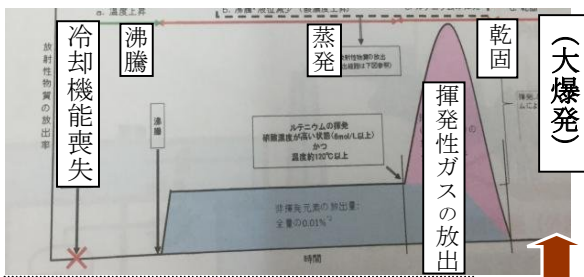
原燃は「電源喪失などの廃液貯槽の重大事故は廃液の蒸発乾固で止まる」としているため資料では乾固後の分析が無い。しかし「析出の硝酸塩を主とする固体は混入抽出有機物を含み核種の崩壊熱で爆発し、放射能の環境放出が起る可能性があるのでは」と質しました。ところが説明は「揮発性ガス放出を管理し乾固を防ぐ」「乾固させないよう努める」との一点張り、答えたくないことがとわかりました。「乾固後の硝酸塩・混入有機物爆発」という重大事故に

つながる可能性を評価せずに新規制基準適合審査をした国の責任も問われます。

「UPZ 5km」は許されない

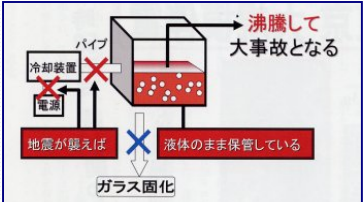
ソ連の「ウラルの核惨事」は硝酸塩が原因の爆発であり、放射性物質飛散は、約三〇〇kmの彼方におよび、いまでも深刻な汚染を残しています。住民の「緊急時防護措置準備区域(UPZ)が五km圏で良い」などは絶対

高レベル廃液タンクの危険性



「原子力災害：検討チーム会合」
 2016.11 原燃提出資料・規制委HP

電源を失ったとき



崩壊熱で高温となり水素が溜まる

硝酸塩・有機物爆発について分析していない!

対に言えないのです。
 廃液貯槽緊急水没で冷却
 東海再処理工場では「廃液貯槽全体を緊急水没させる方法」で冷却機能喪失対策が行われますが、六ヶ所工場でも同様の対策を行うとのこと。水源は貯水タンク一基を使い、非常電源利用のポンプ送水とのことです。しかし電源喪失対策の貯水タンクは「高い場所」に設置し重力利用とし、電力が途絶えてなお使用できるようであれば緊急時利用の意味はないことを指摘しました。

広瀬隆著「白熱授業」一四三頁より
 DAVISJAPAN 2018.1

深層防護とは想定外のことが起こっても放射能を漏らさないよ！と多重防護をすること

本当に真剣に事故対策を考えているのだろうか？

落雷事故や火山噴火、近接の国家石油備蓄基地の火災対策などについて糾しました。

火山爆発対処に決め手なし

十和田・八甲田山系に近接することから、火山爆発時の火砕流や、火山灰による送電線倒壊対策などを質しました。

「火山灰などで危険が迫ったらどうするか？」との質問に、原燃は「再処理途上の放射性物質は・・・粉末やガラス固化体にします」と回答しています。しかし、多量の廃液を抱え緊急事にこのような対応が出来るはずがありません。対策は考えていないということでした。

落雷事故対策は？

最大二七〇キロアンペア

落雷事故対策にあたって最大電流が「二七〇キロアンペア」となっている

濃度4%〜8%までは着火後の燃焼の方向が限定され比較的穏やかだ。該当建屋の圧搾空気を増強したので猶予が出来た」と答えました。説得力のない議論です。

二時間で「ゆとり」か？

さらに「回答書」では、「圧縮空気貯槽の設備容量増加や追加で、水素爆発濃度到達まで二時間のゆとりが出来た」としています。

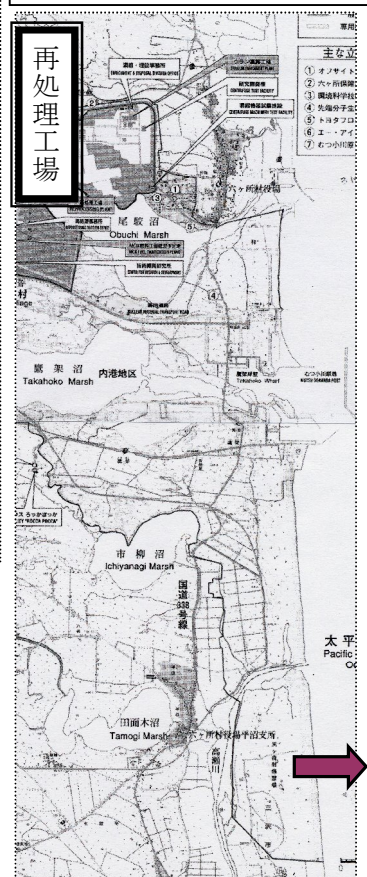
海水のサンプリング

市民からの「二時間程度で余裕といえるのか、廃液をなくさねば危険は解決しない」との質問に「廃液の安全は管理の多様化、多重化で対処する」と答えました。

「操作」はない

海水のサンプリング日時はどのように決め測定したのかとの質問に対し「意図的に、数値が不検出となるような環境試料の採取を行うことはない。毎年四半期毎に期日を設定している」と答えました。サンプリング日時の設定については再度文書で答えるとのことでした。

原子燃料サイクル施設位置図 (部分)
日本原燃株式会社パンフ (平成17年4月)



「天ヶ森射撃場とは米軍の三沢射撃場のことですよ」
(原燃回答書から)

天ヶ森射撃場

高レベル廃液の貯槽隣接の射撃場での訓練は危険極まりない

米軍戦闘機やオスプレイの訓練場

オスプレイやジェット戦闘機は「米軍三沢対地射撃場」で訓練を行っているが、高レベル廃液や核燃料プールから

数キ。「どのような安全対策がなされているのか？」との問いに、原燃は「航空法で上空通過は禁ぜられ、上空を飛ぶことはない」と答えました。

しかし市民から「町内住民は、工場上空を飛行したのを見たことがある」と証言している」との発言や、最近、三沢基地発進の戦闘機が、離陸三分後に燃料タンクの投下事故を起こした、とする指摘がありました。



水めがね

「平成一七年」とあるから再処理工場アクティブ試験開始の時原燃が宮古で説明会を開催した、あの時の配布資料である。「原子燃料サイクル施設位置図」を詳しくみたら、再処理工場の南方十キロもないところの海岸に「天ヶ森射撃場」と小さく書

いてあるのだ。まさかこんな近くでF16やオスプレイが爆弾投下や銃撃演習をやっているとは想像も出来なかった。だがこれは現実なのだ。◆この地図が配られたとき再処理工場には高レベル放射性廃液はなかった。この地図を作った原燃の人達は、軍事演習場の近くに、日本列島を滅ぼしかねない大

量の高レベル放射性廃液を作り貯めたのだ。◆この廃液の存在は、IAEA(国際原子力機関)の年次報告書には「ゼロ」となっている。原燃から報告がなかったと政府は言うがそれでよいのか。米軍機は高レベル放射性廃液の存在を知らないで訓練しているのかも？沖縄と全く同じ状況である。(尚)

縮尺 1:50,000 1000m